

# 幼 児 の 教 育



家庭・保育所・幼稚園

12  
2005

最

新

刊

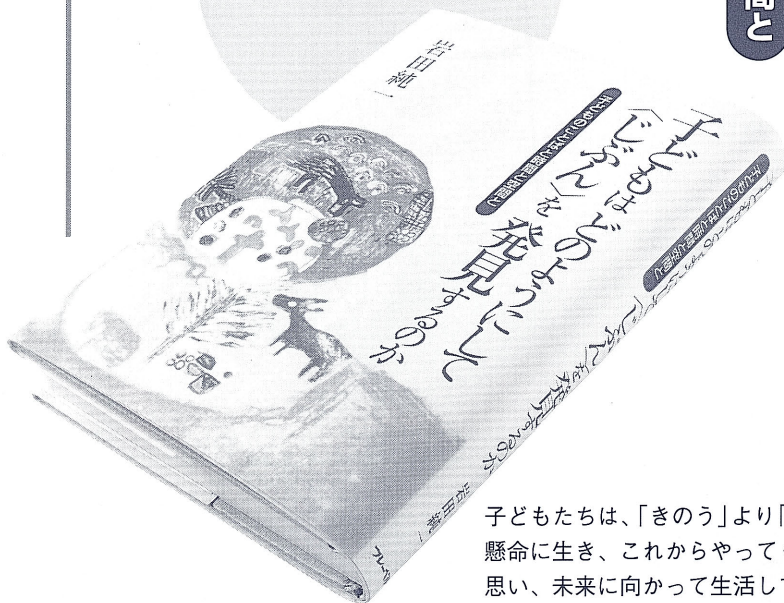
# 子どもはどのようにして

## 〈じぶん〉を発見するのか

子どものことばと時間と空間と

岩田純一 著

子どもは、こんなにもいきいきと  
「あした」を思い描いて、  
自己を育てていく…



19×13cm 232頁  
定価1,680円(税込)

子どもたちは、「きのう」より「きょう」を懸命に生き、これからやってくる「あした」を思い、未来に向かって生活しています。では、子どもは生まれて成長していくなかで、「きのう」の〈じぶん〉は「きょう」の〈じぶん〉と同じであり、「あした」も同じ〈じぶん〉が続いていくという認識を、いつ、どのようにして獲得していくのでしょうか。豊富な保育のエピソードをとりあげて、子どもたちの育つみちすじを考えていきます。

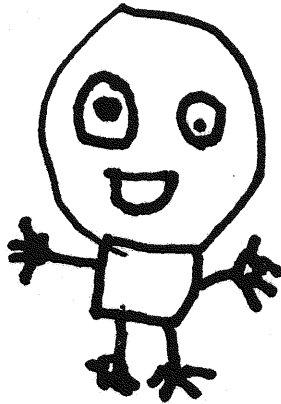
キンダーブックの

**フレール館**

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第104巻 第12号



幼 児 の 教 育 目 次

— 第一〇四卷 第十二号 —

© 2005  
日本幼稚園協会

巻頭言 小児科学は保育学だった…………… 榎原 洋一… (4)

特集〈ゆるい〉

ゆるむ・ゆるい・ゆるやかな…………… 阿部 靖子… (8)

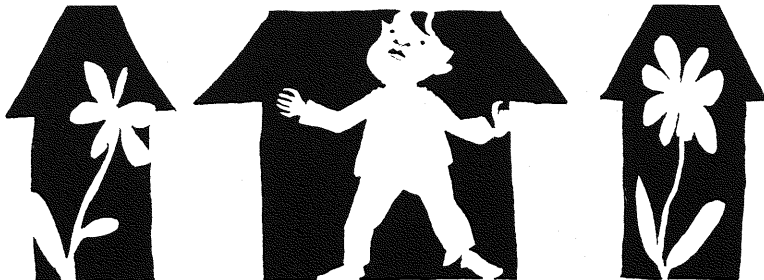
遊ぶ子供の声聞けば…………… 植木 朝子… (12)

ゆるむからだの息づかい…………… 郡司 明子… (16)

新しい学校のあり方を求めて…………… 鈴木 陽子… (20)

ある日…………… (24)

保育「方法」考 (一)…………… 戸田 雅美… (26)



私の白い空……………彌永たたえ…(32)

私が通った幼稚園・保育園(7) 記憶の中の風の抜け道……………森下みさ子…(35)

幼児教育の独自性はどこにあるのか(5) 生命のフレール 下…矢野 智司…(42)

ボランティアから職員へ……………斎藤 実雪…(48)

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(9)……………庄籠 道子…(54)

幼児の教育 第一〇四卷(平成十七年) 総目録……………(61)

表紙絵／中井絵津子

扉題字／津守 眞


扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「花の家」

編集委員／浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 聡子







## 巻頭言

# 小児科学は保育学だった

榊原 洋一



私が専門としてゐる小児科学と保育学の間にはたくさんの共通点があります。業種として考えれば、最近の少子化で、お互いにある意味で構造不況業種である、といったこともつらい共通点ですが、もっと本質的なところに共通することがあります。



まず、ともに成長発達の過程にある子どもを対象としているということです。小児科学は基本的には病気の子どもを対象とするのに対し、保育学は健康な子どもを対象とするといった違いはもちろんです。しかし、小児科学も保育学も、子どもの安寧で健康な発達を手助けするという共通の役割をもっています。かつて、イ



ギリスの精神医学者ボールビーは、第二次世界大戦後の戦争孤児に発達の障害が多い原因を調査し、子どもは十分な栄養と身体の安全が確保されるだけでは、健全な発達が望めないということが明らかになりました。子どもが一人前の大人に育つためには、物質面、精神面両面での支援が必要であり、小児科学、保育学はともに入った条件を満たすことを活動の目標にしています。

主な対象は子ども自身ですが、子どもを取り巻く環境、特に親や家族への働きかけが必須の活動内容であることも大きな共通点です。子ども自身よりも、親との対応で苦労することも同じです。子どもだけでなく、子どもにとってもっとも影響力のある大人である親に対しても、働きかけるといふ点も共通しています。

もともと、子どもを健やかに育てたいという思いは、時代や場所を問わず大人の共通の思いでした。子どもが心身ともに健康な大人になるためには、まず身体が健康に育っていく必要があります。そのためにもどのような食べ物を与えて身体を丈夫にし、病気の時にはどのように対応すればよいのか、といったことを経験から得られた知識を体系として纏めたのが小児科学の始まりです。しかし、子どもは栄養を十分に補給し、病気になったら治す、だけでは、一人前の大人に育つわけではありません。トイレトレーニングから始まって、基本的な生活習慣や、しつけや行儀などの社会技能（ソーシャルスキル）を身につけなければなりません。つまり、現在



保育の現場で行われている人間としての基本的な生き方を身につける必要があったのです。

現在は小児科学と保育学が受けもっている人生初期の支援を、江戸時代には医師が担っていました。香月牛山（かずきござん）は、「小児必用養育草」（しようにひつようそだてくさ）という日本最初の体系的な育児書を著した医師です。香月牛山は一六五六年に筑前に生まれ、貝原益軒に学んだのち医学を修めて、中津で医業を営んでいました。小児必用養育草は六巻からなる書物で、一、二巻が乳児期の育児について、三、四巻が子どもの病気について、そして六巻が教育に当てられています。その内容を見ると、妊娠中の注意から始まり、出産後のケア、母乳の与え方などの育児に関する事項に続いて、さまざまな病気の治療について述べられています。さらに、子どもの食事の内容、衣服の選び方、生活習慣のつけ方、しつけといったことに多くのページが割かれており、子どもの育ち全般の専門家であったことが窺えます。

香月牛山の先生である、貝原益軒は養生訓を著した医師ですが、「貝原篤信家訓」という幼児の教育原則の書を残しています。

このように、現在小児科学の仕事である子どもの病気を治すことは、子どもを育てるといふより、より広い営為の一環としてとらえられていたのです。





現代の小児科学は、自然科学として大きく発展し、子どもの発達について遺伝子や脳科学などの先端科学を取り入れています。一方、保育学は、子育ての人間科学の応用分野として現在に至っています。その結果、同じ子どもの成長と発達を見守る専門家集団でありながら、大変に異なった方法論をもつ集団にそれぞれ分化してきています。

しかし香月牛山のように歴史的にみると、小児科学と保育学はもともとは同根であったことが分かります。そしてその後異なった経緯を経て現在に至っています。

現在、やや科学的還元主義に偏った小児科学では、入院している子どもや慢性疾患の子どものQOL (quality of life) をみなおすようになってきています。

また保育学にも、発達心理学や脳科学、人間工学などの知見を取り入れていくという気風が生じつつあります。

少子化や、幼保一元化という時代の大きな波は、小児科学や保育学にとっては大きな試練ですが、同時に変革のチャンスでもあります。小児科学と保育学がお互いのルーツを確認しあうとともに、再びお互いのこれまで発展させてきた方法論や知見を共有化しながら、一緒に子どもの専門家として協働していく必要があると思います。

(お茶の水女子大学)

特集 〈ゆるい〉

ゆるむ・ゆるい・ゆるやかな

阿部 靖子

我が家は自宅の中に事務所があるいわゆるSO  
HO (Small Office Home Office) で、玄関を入  
ると事務所になっています。カタログや資料の類  
を納める本棚が壁一面の上部に作りつけてあり、  
その下に複写機、プリンター、パソコンと机が並  
んでいます。

ある日、本棚の中央で左右の繋ぎ目が一ミリ

メートル程開いているのに気付き、後で何とかし  
ようと思いました。数日後、出先から帰宅する  
と、蓋の外れたパソコンと複写機の上で本棚がモ  
ビールのように宙に揺れています。慌てて本棚が  
崩れ落ちないように左手で支え、右手でカタログ類  
を一冊ずつ床に積み上げていき、右側の中身を全  
て取り出したところで、残り左半分がバランスを

失って机の上に脱落してしまいました。一面に散乱した書類や本と壊れた本棚を片付けるのは一苦勞でした。

こうなった過程は、ビスで壁に固定してあった本棚の裏板が重みに耐え切れず一部破損。すると本棚が少しずり落ちて、左右の本棚を繋いでいた接合ボルトに本来かかるべき力の向きとは直角方向の力が加わって、ボルトが緩み接合部が開く。このとき異常に気付いたのに放置したのでさらにボルトが緩んで遂に外れてしまったのです。初めから締めが緩かったわけではありません。ボルトは時間の経過で緩むことがあるし、何より正しい力の向きに作用しなければ緩んでしまい、一度緩むとその後の崩壊は早いという身近な事件でした。

一方、斜路の勾配は普通緩いほうが好まれます。当然、長すぎない距離であれば急勾配よりも緩勾配のほうが上り下りしやすいからです。近年、ユニバーサルデザインという考え方が普及し

て、誰でも使えるデザインが求められるようになりました。そこで建築においてはバリアフリーの手法が一般の建物においてもとられるようになってきました。不義理などのために相手先を訪問しにくい場合『敷居が高い』と表現しますが、従来出入り口に段差は付き物で、敷居は高いものでした。それは建築の納まり（部材の取り合い）の都合ということもありますが、水や塵埃が敷地や建物内に入りやすくする工夫であり、さらには精神的な境界でもありました。

それが最近ではバリアフリーにするために段差を無くして階段状の部分には斜路を併設するようになってきました。前述のように通常建物の基準階は道路よりも少し高く計画します。道路から建物入り口までの距離が長ければ歩いては気付かないくらい緩い勾配がつけられますが、そうはできないこともあります。階段と斜路のどちらを歩くのが楽かは人によって異なります。車椅子使用者、

視力の弱い人、怪我人、パーキンソン病、高齢者、妊婦、幼児、あるいは健康な成人であっても大きな荷物を抱えていることもありますし、身体的には問題がなくとも習慣ということもあります。大事なことは『ここは平坦ではないので注意が必要だ』ということがはっきりとわかり、その上で、各人が使いやすいデザインがなされていることです。ただ緩勾配なら良いというわけではありません。

ある集合住宅では道路から入り口までの距離が七メートルあまりで床までは四十七センチメートル高く、三段の広い階段と幅一メートルの斜路が併設されていました。段差が十三センチメートルの階段はほとんどの人にとって苦にならないものですし、斜路の勾配は一般基準を満たしています。ところがその集合住宅の玄関前を観察すると、そこを通る人のほとんどが日常的に斜路を歩き、階段を歩くのは雨や雪が降って斜面が滑りやすいと

き、またはだれかとすれ違うとき、引越し業者が斜路を占有されているときでした。そこで、斜路の幅を広げ、床に滑りにくいタイル

を張り、手摺を設け、道路とアプローチ部分を遮っていた高い塀を低くして視界を広げました。

こうすることで、歩行者、前面道路を通る車の双方にとって安全になりました。

この数年都心部での大規模再開発・超高層建築ラッシュで自動回転扉が増しましたが、昨年六本木ヒルズで児童が自動回転扉に挟まれ圧死するという痛ましい事故がおき、その後、類似した事故は他にもあったことが明らかになりました。その結果、自動回転扉の撤去や改修工事が続いています。このニュースを聞いたときに「やはり」と思ったのは私だけではなかったでしょう。あれは



危険だと感じていた人は多いと思います。危険を察知すればそれを回避しようと思いますが、往々にして子どもや高齢者は危険を察知できなかったり、たとえ察知したとしても、それを回避する手段がなかったりするので、施設側では二重三重の安全措置を講じねばなりません。配慮の足りないことが重なる交通事故につながる可能性が高くなるのです。

六本木ヒルズについていえば、商業施設、美術館、ホテル、オフィス、住宅と用途の異なるいくつかの建物を集積させ、あたかも遊園地であるかのごとき宣伝で集客をねらいました。そのため精神的な境界であるところの『敷居』は一見したところ低く設定されたのです。大勢の人が来場できるよう、また入り口で混雑しないように、回転扉は大型になり、また大型であるがゆえに自動になりました。なおかつ回転速度が上げられ、誤作動で止まることの無いようにセンサーの感知範囲が

狭められました。皮肉なことにまさに大勢の人に來てもらおうとしたことが、事故の直接の原因となっていました。回転扉が接触を直ぐ感知して止まり戻る機構が働いていれば、また扉の隙間に体の一部が巻き込まれないようバリケードがあればこの事故は起きなかったか、起きてもし死には至らなかつたかもしれません。製造者・建物の管理者の責任が問われるのは当然ですし、私たち建築に携わる者全てにとって、安全な建物を作るうえで心の戒めとすべき事件です。

冒頭の本棚脱落も回転扉の事故も、まさか自分の身に災難が降りかかろうとは思いませんでした。気持ちの緩みがあつたのでしょう。本棚の脱落事故を見た友人が「建築屋は人のことには一所懸命なのに自分のことはおろそかに考えがちだね。僕のところも大地震がきたら圧死するかもしれない」と言いました。私たちはいつも安全に注意を払っているつもりでも、たまたま気が緩んでいた

り、抜け落ちているところがあったりと、完璧ではありえません。ですから、工事関係者、施設管理者、使用者の全てが再度安全に関する見直しを図り互いに率直な意見を交換し、『緩んだ螺子を締めなおす』必要があるのではないのでしょうか。

せかせかとしがちな現代生活の中で、ゆるやかな時間に身を任せる生活を楽しむためには、矛盾するようですが、締めるべきところは締め、緩めるべきところで緩める術が求められているように思います。  
(アトリエ レッズ)

## 遊ぶ子供の声聞けば……

植木 朝子

平安時代末、京都の人々を魅了したのはやり歌があった。これまでの歌謡に比べて、目新しく華やかな魅力をもっていたために「今様いまさま」と呼ばれた

歌々である。今様を愛した時の権力者後白河院は、その詞章を集めて『梁塵秘抄りょうじんひしやう』を編んだ。この書名は次のような故事によっている。すなわ

ち、中国に、虞公と韓娥という美声の持ち主がいたが、彼らの歌声は、梁のまわりを三日間響き巡り、また梁の上の塵を動かすほどのものであったという。

この「梁塵」の名を冠した今様集の中で最もよく知られているのは、次の一首であろう。

遊びをせんとや生まれけむ

戯れせんとや生まれけん

遊ぶ子供の声聞けば

わが身さへこそ ゆるがるれ

遊びをしようとしてこの世に生まれてきたのであるうか、それとも戯れをしようとして生まれてきたのであるうか、無心に遊んでいる子どもたちの声を聞いていると、自分の体までが自然と揺れ動きだすように思われるよ——老境に達した人

が自分の境涯を顧み、童心にあこがれる心の綾を、はずむような律調にのせて歌う美しい一首である。遊女が自らの境遇を顧みて、身を揺るがす悔恨を歌ったとする説もあるが、歌の主体を遊女に限定する必要はなく、ある程度の人生経験を積んだ大人の感慨と考えたい。

この今様は、主体を大人一般と見るか、または自らの罪を意識している遊女と見るかで議論が繰り返されてきたが、その中で、遊女説に立ちつつ、「ゆるがるれ」を「揺るがるれ」ではなく「緩るがるれ」とする論が提示されたことがある（藤原正義「今様「あそびをせんとや」——その発想と表現」『日本文学』第二〇巻第三号 一九七一年三月）。遊んでいる子どもたちの声を聞いて、自然と心が安らいでくると解するのである。「ゆるがるれ」は四段動詞「ゆるぐ」の未然形に自発の助動詞「る」の已然形「るれ」が接続

したもので、上の「こそ」と対応した強調の係り結びになっている。「ゆるぐ」という四段動詞としては、揺れ動く意の「揺るぐ」を考えるのが普通だが、藤原論文は、ゆったりとくつろぐ意の「緩るぐ」を当てている。問題は四段動詞「緩るぐ」の用例が『大鏡』の一例しか知られないことで、「緩るぐ」説を積極的に支持するにはやや不安が残る。『大鏡』の例は「兄殿は、いとあまりうるはしく、公事よりほかのこと、他分には申させたまはで、緩るぎたる所のおはしまさざりしなり」というもので、源雅信の人物評として「あまりに端正で、朝廷の政務のほかのことを余計にはお話しにならず、ゆったりとくつろいだところがあまりにならなかつた」という箇所である。

冒頭の今様に戻って考えるに、「遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけん」というはずんだ律調や、「遊ぶ子供の声」として想像し

得るにぎやかさからは、気持ちが安らぐというより、はずんだ気分になり、体さえも動きだしそうになるとい



う方が自然ではないか。先に「揺るぐ」として解釈した通りである。『梁塵秘抄』の注釈史においても、「揺るぐ」が通説となっており、藤原論文を支持するものはその後も見当たらない。

さて、これまでにいくつかの大学の授業でこの今様について話す機会があつた。「揺るぐ」「緩るぐ」二通りの説のあることを説明したあと、受講生自身の考えを書いてもらうと、意外に「緩るぐ」説を支持する学生が多い。遊ぶ子どもの声によって気分がはずんでくる、というよりも、二度と戻れない子ども時代への喪失感からどちらかと



いうと静かな諦観ともいうべき心境に至ると感じるようなのである。そこまでいくと「ゆったりとくつろぐ」という「緩るぐ」の意味からも逸脱していくのだが、学生時代の終わりが見えてきたところで将来の不安におびえる彼らは、無邪気に遊んでいられた子ども時代を懐かしみ、この今様から失われた時への哀愁を強く感じとっているらしい。そうした文章を読むと何やら痛々しいような思いにもとられる。一方、興味深いのは、年配の受講生がほぼ「揺るぐ」説を支持することである。私の出会った社会人受講生は女性が圧倒的に多かったが、彼女らはこの今様から子どもと一緒に遊びだしそうになる明るさを感じとり、子育ての経験などを交えながら、子どもの遊びの躍動感を生き生きと記してくれた。

こうした受け止め方の違いは、年齢によるもので、今の若い学生たちが人生経験を重ねた後には

「揺るぐ」説を支持するようになるのだろうか。それとも、社会全体の気分として「揺るぐ」説は片隅に追いやられ続けるのだろうか。子どもの数が減り、その遊びも、屋外の集団的な活動から、屋内の少人数での静かなものへと変質していると言われているが、「遊ぶ子供の声」そのものが実感をもつて捉えられない時がもはやってきたならば、冒頭の今様はどのように理解されるだろう。

それでも、幼稚園や保育園のそばを通るとき、子どもたちの高い声が響いてくると、「遊ぶ子供の声」の普遍性を思う。そしてその声は私達に様々な感慨を催させるものであることを改めて思う。今様一首の解釈という問題からいったん離れてみると、子どもの声を耳にした時、大人たちはわくわくしたり、元気になったり、優しい気持ちになったり、郷愁にかられたり、感傷的になったりする。身体は子どもたちと一緒に揺れ動きだ

し、一方、心は大人社会で強いられている緊張が緩んで、ゆったりとおおらかになるという場合もある。う。「揺るぐ」と「緩るぐ」は私達の中で、

隣合わせに共存しているのかも知れない。

(同志社大学)

## ゆるむからだの息づかい

郡司 明子

近頃、「ゆるい喫茶店」が姿を消しつつあることを耳にしました。ある人は本を読み、ある人は商談をし、またある人は、談話に花を咲かせる。コーヒー一杯で、何時間でも腰を落ち着けていら

れる場所。そんなゆるみのある空間がなくなってきた。一方、素早い対応を売りに、客の回転を優先すべく、固い椅子で、適当な居心地の空間を演出するコーヒーショップ。長居する気にはなれ

ません。

両者の違いは何でしょう。私は息の深さだと思  
うのです。『ゆるい喫茶店』では、安定した椅子、  
誰にも咎められない安心感、スローな店の雰囲気。

しぜんと深い呼吸に誘われます。全身を椅子に  
委ね、自分のリズムで深く息を吸い、そして吐  
く。温かい飲み物が、のどを通り、全身に染みわ  
たつていく感じ。そこにゆるいからだがあられ  
ます。

さて、日々の子どものからだはどうでしょう。  
親や教師の前で、こうあらねばならない自分を演  
じ、固いからだになってはいませんか。あ  
るいは、友だちとの関りにおいて、居心地の悪さ  
に、吸い込んだ息を知らぬ間に止めている。そん  
な張りつめた思いや、ぎこちなさを味わっている  
人はいないでしょうか。小学生を見ていても、朝  
から通学のラッシュできついからだを引きずり、

ようやく放課後になったと思いきや、遊ぶ間もな  
く、習い事やら学習塾へ。彼らのからだには、緊  
張の波が押し寄せ続けているようです。勿論、  
ずっとゆるいからだで過ごす訳にはいかないこと  
も確かです。学習中、教師の話や友だちの言葉を  
聞き逃すまいと集中して耳を傾けること。いけな  
いことをして叱られる経験。そんなときは、我が  
身を省みて、引き締まる思いになつてもらわなく  
ては困ります。私たちのからだに、幾度となく繰  
り返しやつてくる緊張と弛緩。それらとうまく向  
き合っていきたいものです。

小学生のからだが決まってゆるむのは、なんと  
いつでも休み時間。誰に見られている意識もな  
く、思い思いに過ごしている様子は、自然体であ  
り、その子ならではの息づかいが聞こえてくるよ  
うです。外遊びをしている子どもの息は高まり、  
からだもはずみます。相手からだを委ね、預

け、まかせる遊びは自然とほころんだ息と表情になります。静かに本を読んでいる子の息は落ち着き、整ったリズムを刻んでいます。それから、お昼時もほつとゆるむ時間です。食べ物を体内に取り入れることは、からだが欲するやすらぎを得ることができます。

学びの場面を見てみましょう。例えば、造形表現活動において、あらゆる素材に全身で関ること。自身のからだと「もの」との距離がなくなり、そのものに同化していくような溶解体験から、子どもは多くのことを学びとります。自分にとってその「もの」は心地よいのか、否かの判断。つまり、この「もの」に気をゆるめてもよいかどうかを瞬時にして見抜くのです。それは皮膚感覚をはじめ原初的な感覚を十分に働かせて捉えていく情報でしょう。これは、身の安全を守るうえでも重要なセンサーといえます。幼児にとって

は遊びの場面で往々にして見られることではないでしょうか。

ある意味、子どものセンサーはかしこく、時にはずるがしこくも

働くものです。例えば、掃除場所における、ゆるい空間ときつい空間を見抜き、自分の行動を決定づけていく。さらにはゆるい教師ときつい教師を見分け、必要に応じて話す相手を変えてみる。一人の教師に対しても、ゆるさときつさの幅を見極めて、話すタイミングを変えてみるとか……。これらの判断は、相手（教師）の息の間合いを、子どもが皮膚感覚を研ぎ澄ませて掴むものなのでしょう。面白いものです。

最後に、子どもも私も一緒にゆるむ、とっておきの時間をご紹介します。それは、帰りの挨拶



拶をするときです。日直さんが、「深呼吸をしましょう」と声を合わせて言います。そこで、全員同時に一呼吸。すーっと吸い込み、からだにたっぷり息が入ったところで、チベタンベル（パキスタンの鐘）を一鳴りさせます。遠くまで響くやわらかい金属音と共に、ふーっとからだじゅうの息を全て吐き出します。子どもたち一人ひとりの息

の音が静けさを保ちながら幾重にも重なり、しつとりと心地よい空間が広がります。まさに、ゆるみの境地。この日、宿題を忘れてやるせなかった子。友だちとうまくいかなくて悔しい思いをした子。慌しくて、十分に子どもの話や表情に目を配れなかったなと反省している私。いろいろな人のいろいろな思いが、この深呼吸で吐き出されていくのです。ことばはないけれど、息を合わせることで、思いが重なり、教室という空間が一つになるのがわかります。子どもたち同士が見えない糸

でつながりあっているような感じさえしてきます。新しい息がからだじゅうにめぐり、それらを吐き出すと、今日のいやなこともいいことも、からだの記憶として整理されていくような気分になるのです。そして、元氣よく「さようなら」の挨拶。また、新しい明日に向かってからだを整う瞬間です。

さて、本稿を終えるにあたり、ここでも深呼吸をしてみたいと思います。では、大きく鼻から息を吸って、おなかにため、胸郭まで広がってきたら息を止めて、二秒の我慢。一気にぶはーっと、口から吐いてみてください。あとはできるだけ長い時間をかけてゆっくりと最後まで吐き出します。どうでしょう。ゆるいからだ“になりませんか？

（お茶の水女子大学附属小学校）

# 新しい学校のあり方を求めて

鈴木 陽子

一、きのくに子どもの村、

ある朝の職員室の様子

◇六月二十二日（水）九時

大人の朝の連絡が終わると、職員室に子どもたちが入ってきました。大人に話しにきたり遊びにきたり、この部屋は子どもがいつもいっぱいです。「おはよう、ようこちゃん。きょうは昔の遊びある？」と一年生のSくんがやってき

ました。「きょうはないなあ。火曜日にまたしようね」

二、先生のいない学校、きのくに子どもの村

この学校は、一九九二年に和歌山県橋本市の山の中に誕生した私立の小さな寄宿学校です。小中高生あわせても子どもは二百人ほどです。ここでは先生と呼ばれる人はいません。けいたくん、かわちん、まるちゃん、そして学園長もほ

りさんです。

変わったところはもつとあります。もう少し、この日の様子を見てみましょう。

### 三、小学校の授業

◇六月二十二日（水）九時十分

今日は一日中プロジェクトと呼ばれる授業です。「ファーム」では、連絡の後、バスで十分ほどの橋本市内のたんぼに出かけていきました。田植えをします。

クラスは四つあり、「工務店」「ファーム」「ひつじハウス」「おもしろ料理店」という名前です。子どもたちは年度の初めに各クラスを活動内容や友人関係、担当の大人などを考えて選びます。最も時間数の多いプロジェクトという授業の内容は、建物を建てたり、米を作ったり、羊を育てた

りします。活動内容はそれぞれに違いますが、衣食住から題材をとっています。

### 四、変わった原則

その1：自分で決める

子どもたちはクラスを選ぶだけではありません。たとえば、金曜日のプロジェクトの時間は翌週の活動内容を自分たちで決めます。また週に四回、クラスを離れて選ぶ「チョイス」があります。ダンス、合奏、美術、書道などで、先ほどの「昔の遊び」もそのひとつです。つまり、いろいろなことを自分で決めていく学校なのです。

その2：体験を通して学ぶ

◇六月二十二日（水）

ファームの田植えで、子どもたちは自作の道具を転がしながら苗を植えていきました。まっ

すぐに進んでいるつもりでも徐々に曲がってしまします。ズレが大きくなり、苗の密度の濃い部分と、ぽっかり穴の開いたように何も無い部分ができました。「あれ？ ハゲができてる」「まっすぐ進むって難しい〜」ハゲの部分にも苗を植え、もう大丈夫、と思つて見たすと、植えはじめあたりの苗がプカプカ浮いてきています。さしがあまいのと、みんなが何度も通つたためでしょう。浮いた苗を拾い、もう一度植えなおしました。

きのくには、椅子に座つての授業は学習の一部にすぎません。それよりも、このような体験を通して学ぶ授業を大幅に取り入れています。大人はこうしなさいとは言わずに、子どもたちの次のような過程を見守ります。

(あれ？ へんだなあ)(どうしたらいいかなあ)

(こうしたらどうだろう)(うまくいかないなあ)(あつ、こうすればいいんだ)

もちろん子どもにあわせて手を貸すこともあります。

そして「見て！ できた！」「たのしかったー」試行錯誤してできた喜びを味わえるように配慮しています。

### その3：個性を重視する

ファームは一年生から六年生までの十九人です。きのくには異年齢の中で男の子も女の子も混じつて、いろいろな体験ができるようにしています。「チヨイス」でも同様で、活動するグループの人数は、七人のときもあれば三十二人です





ときもあり、状況に応じて柔軟なグループ編成をしています。

こうした活動を通じて、わたしたちはどの子にも、感情、知性、人間関係のいずれの面でも自由な子どもに育つてほしいと願っています。

#### 四、子どものようすから

見学にみえる方は、よく、「子どもの村の子は、とにかく元気で、目がきらきらしている」といつてくださいます。

今年、きのくにの一年生になった私の娘はこんな感想をもらっています。「うちはラッキーやなあ。きのくにに入れて」「そりゃ楽しかったよ。

田植えが一番楽しかった」

先日、卒業生が中学校の教育実習に来て、こんな感想を書いていました。「授業は、子どもから

の鋭い質問に困惑。それにしても楽しかった！きのくにには、実習生も自由にしてくれる学校です」

子どもたちの顔を思い浮かべると、この学校をつくるのに大きな影響を与えたA・S・ニールの言葉を思い出さずにいられません。

「まず子どもを幸せにしよう。そうすればすべてはその後に続くのだ」

(きのくに子どもの村学園)

#### 参考文献

堀真一郎『きのくに子どもの村』プロンズ新社 一九

九五

堀真一郎『自由学校の設計』黎明書房 一九九七



撮影・平野 清

# ある日



# 保育「方法」考 (一)

戸田 雅美

## 一、はじめに

教育「方法」という言葉は広く使われる言葉である。保育「方法」という言葉も使われる言葉である。また私自身も使うこともある。しかし、保育の場面の中で「方法」という言葉を使うことにはある種の

違和感が常に伴うのは、私だけであろうか。

ここでは、保育「方法」という言葉に伴う「違和感」をあえて自覚化して検討してみたい。さらに、保育の場面における「方法」という言葉と「方法」という言葉の一般的な意味とのずれについて吟味することによって、保育における「方法」のとらえ方について

考えてみたい。

今回の(一)では、私自身の中での「違和感」の存在とその在り様を明らかにする。さらに、次回(二三月号掲載予定)、保育における「方法」という言葉について吟味することによって、保育における「方法」というとらえかたについて考えていくこととしたい。

## 二、「違和感」の所在

はじめに、私が保育の「方法」という言葉に出会って、「違和感」を感じた場面について考えてみる。

保育学会第五十八回大会(二〇〇五年五月)における、大会企画シンポジウムⅢのテーマは「こどもの傍らに在る大人になるために―実践研究者になる―」であった。このシンポジウムのために事前の話し合いをもったとき、提案者の一人であった西原彰宏氏は、ある一人の子どもとその家族とのかかわりについてまとめられ、その事例を通して「傍らに在ること」につい

て述べられた。そして、「傍らに在ること」そのものが「教育方法」といえるのではないかと提案された。西原氏によれば、とかく保育には「方法」がない、と批判されがちであることに対して、いかにも何気なく見えてしまう「傍らに在ること」そのものが大切であり、このことこそが保育の「方法」といえるだろう、という理由から「教育方法」という言葉をあえて使ってみたのだという。

けれども、これに対し私は「傍らに在ること」が大切なこと、保育には「方法」がないという批判が不当なものであること、という点については基本的には同意しつつも、保育の「方法」として「傍らに在ること」とをとらえることに「違和感」があり、その点をめぐって議論をしたが、このときには検討を深める時間的余裕がないまま、保育学会のシンポジウムにおいては、西原氏も私も「方法」の話には触れなかった。つまり、「方法」についての議論は、私の中では、課題

のまま残されたのである。

実は、私自身、以前かかわっていた公立幼稚園の研究の場で「幼稚園の研究は、幼児理解に終始している。方法の提案がなければならない」という批判をされたことがあり、その研究発表の場における講演の題名を『「方法」としての幼児理解』としたことがあった。すなわち、「幼児理解の研究」がまずあって、その発展形態としての「方法の研究」があるのではなく、保育においては、「幼児理解をすることそのものを「方法」と考えるべきだ」というものであった。この考え方は、西原氏の提案ときわめて近いものと考えてよいだろう。

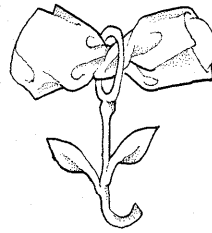
幼児理解と「方法」を分けて考えたり、まして「方法」だけを研究したり、提案したりすることはできないという点においては、今でも私の考えは変わらなない。けれども、幼児理解を「方法」として使うと考えると「違和感」があり、『「方法」としての幼児理解」

という言い方をすることに、今は慎重になつていく。なぜなら、「幼児理解をすることが、関係性の中で、結果的に『方法』として機能するだろう」ということはいえると考えられるが、これを反転させて、『「方法』として機能させるために幼児理解をする」と考えることは、保育の本質から大きく外れるように感じられるからである。

### 三、具体的な保育の場面における「方法」の実態

「方法」をめぐる「違和感」は、具体的な保育の場面を検討しようとするときさらに深まる。

ある幼稚園の三歳児クラスの六月のことである。担任の教師がそのとき気になっていっているというゆりを、私は時々見ていた。



ゆりは、幼稚園にいる子どもたちやそこに展開している遊びに興味がいっぱいという様子で、子どもに近づいていってはそのことに驚いた相手とトラブルを起こしたり、遊びに無理に入ろうとして相手を泣かせてしまったりの連続だった。元気がよいため、四歳児が相手でも同じように行動するので、三歳児に対しては年下だからと意識している四歳児が、ゆりに対しては思わず本気で相手になってしまおうという場面も何回かあった。

その日の中で、一度、三歳児の女児三人が、保育室で使っていたかごの中に入り込んで身を寄せ合うのが楽しいという感じで遊んでいた。そこへ、ゆりが強引に入って、相手の子が泣き出してしまったという場面があった。ゆりも「入れて」とは言ったものの「狭いからだめ」という相手の言い分が納得できず、強引にかごに入ってしまったからである。担任は、それぞれの子どもを丁寧に聞いて、共感し、どうしたらよ

いか考えようとしていたが、互いに納得できる良い「方法」が見つからないまま、時間の経過とともにゆりが他の遊びを見つけてこの場を離れ、このトラブルは終わりとなった。

その日、降園後次のような話し合いがあった。「この遊びをこんな風に遊びたい」というよりも「友達と一緒にという気持ち」を感じたい子どもが多いようにだし、ゆりも「遊びたい」、「友達とも一緒にいたい」という気持ちが強くあつて、その気持ちそのものは大切なのだが、それがトラブルになつていっているように見える。だから、かごのように「一緒に」の感じがするものを環境にもっと用意したら、また違った動き（たとえば、先生がかごの隣にゆりのための場をとっても素敵に作つたりすると、そこにはゆりが入るかもしれないし、他の子が入るかもしれない等）も出てきてよいのではないだろうか。このような具体的な「方法」の提案を受けて、担任は、さっそく、段ボール箱を開いて

作った囲いなどを用意した。

二週間後、再びその園を訪れる機会があり、担任からその後の話を聞くことができた。

具体的な「方法」として用意した囲いは、実際にはゆりには役に立たなかつたらしい。ところが、ある雨の日、クラスの子どもたちが全員保育室で遊んでいたため、その賑わいがこわくて、テラスから覗くようにしていたのぞみのために、テラスに一人用のおうちを用意していた囲いで作ってあげることができた。のぞみはそこでほっとできたようだった。その様子を一人で部屋の隅にいたひろとが見ているのに気がついた。担任が誘うと、ひろともテラスにやってきて一人用のおうちを、のぞみのおうちの隣に作ってもらって、そのおうちから他の子の遊びを見るようになった。二人はその一人用のおうちが気に入って、毎日隣同士に作っているうちに、二人のあいだには安心できる雰囲気が出てきた。

ゆりはというと、たまたま妹にあたる赤ちゃんの診についていくという経験があつて、人形を赤ん坊に見立てて服を全部ぬがせては検診の真似をするという「病院ごっこ」を始めた。そこで、担任が廢材を使って聴診器を作つてやると、それ以来毎日「病院ごっこ」をしている。聴診器は特に気に入り、必ず自分のロッカーに大事そうにしまつて帰るといふ。「病院ごっこ」はいつもゆりが始めるので、他の子どもが入れてもらう立場になるせいも、病院ごっこがとても楽しいからか、前ほどトラブルもなくなった。

そういうえば、他の子どもがゆりを見る見方も変わってきているかもしれないという。たまたまその日も、プールから出た後ひろと、ゆり、のぞみと三人が順に並んで色水遊びをしていた。以前だったらトラブルの多いゆりのそばにひろとやのぞみが近づくこともなかったのに、それぞれ個人用の小さな机で同じように園庭に向かつて並んでいた（けつして向き合つて一緒



にやっているわけではない」とはいえ、とても落ち着いて隣同士で色水遊びをしていられるのを見て驚いたそうである。

この事例では、具体的な「方法」として用意した囲いはゆりのためには、直接的には役に立たなかった。しかも、その囲いは「一緒」の感じがするものとしてではなく、のぞみやひろとが「一人」の安心感をもつために機能したのである。これは、そもそも話し合いで提案された「方法」が誤っていたと考えるべきなのであろうか。ただ、結果を見ると、ゆりは自分の遊びが楽しくなってトラブルも少なくなり、のぞみやひろとも幼稚園という大勢の子どものいる場で安心でき、落ち着いて遊び始めるようになった。これはただの偶然であり、「場当たり的」な保育行為の結果に過ぎないのだろうか。

そうではないだろう。担任はゆりの病院ごっこを見て聴診器を作ったり、のぞみやひろとの様子を見て一

人用のおうちを他の子がいないテラスの隣同士に作ったり、色水遊びの場として一人用の小さなテーブルを出したりしている。そこでは、その時々の子どもの思いを理解しながら、その思いがうまく実現できる「方法」を考え、提案し、子どももその「方法」の提案を納得して受け入れていると考えられる。そこには、「丁寧に編み出されていく保育のプロセス」を読み取ることができるとは、しかし、こういう「方法」が、保育の、いわゆる「方法」なのだろうか。

\*子どもの名前はすべて仮名である。

ここでは、「方法」という言葉をめぐる私自身の「違和感」を手がかりに、保育の「方法」のについての問いの所在を明らかにしてきた。(二)ではこの問いに対する論考を試みたい。

(東京家政大学)

# 私の白い空

彌永 たたえ

新年を前に試作品の凧が空にあがる。

と二行書けば、冬の年中行事の一場面を構成するこまごまとした小道具も同時によみがえってくる。糊や和紙、凧を作るための材料は、日本間で障子の張り替えをしていた母からわけてもらったのだろう。今よりも小さな版の官製ハガキ、桃色の桜が消印のあたりに印刷されたハガキを二つ折りにして凧糸を巻き付けてい

たような気がする。実際に空に揚がるような立派な凧を完成させたのはすでに小学校に通っていた兄だけで、私は糊でべとべとに丸まった和紙の塊を家の中にうち捨てて、兄と兄の作った凧の後を追って走るだけだったかもしれない。その頃のことに関しては、曖昧なままぼやけている部分と、経過した年月の割には驚くほど鮮明な部分とが同じ重さで記憶の中に残ってい

る。兄が自分で作った風になん色もどんな模様を描いていたのかは憶えておらず、その時私が家の前の空き地を走りながら、履いていたタイツがずり落ちてくるのを心配していたことにはかり確信がある。灰色の縄編みのタイツの伸縮は、私の成長に追いつけず、引つ張つても引つ張つても、股の補強部分が太股のあたりまで落ちてきてしまうのだ。

忘れてしまったことがつまらないことで、憶えていることが大事なこととは言い切れない。その時兄が作った風は、たとえ私が憶えていなくても素敵な風だったかもしれないし、タイツがずり落ちてくる感覚の生々しさには価値の与えようがない。そして、不鮮明な映像としてすら思い浮かべることでできない、年末の真つ白く張りつめた空は、私の語る「年末の真つ白く張りつめた空」という「言葉」でしか残っていない。記憶の中で、「確かなこと」と「忘れてしまったこと」が順位を争わずに同居する。その他に、「忘れ

てしまったことさえも忘れてしまったこと」が全体の雰囲気を支える。

さらに古い記憶に遡れば、「確かなこと」と言えることがほとんど無い。父に連れられて荷物を引き取りに行った汐留貨物駅構内のほの暗さ、横浜港を出ていく船と船長さんの家で食べた夕飯、慶応病院の通用口で割れていた薬瓶の破片にへばりついた桜の花びら。

御殿場の軍人住宅に祖母が届けてくれた子供雑誌と食卓の上の山羊の乳。どれもこれも「言葉」だけが残り、実際の映像は暗く沈んで遠ざかっていく。「曖昧な記憶」が「忘れてしまったことさえ忘れてしまった」ような物たちに包まれて去って行くのを少し寂しい気持ちで見送るばかりである。

私は両親が二人ともに職業的保育者であり、十代後半から二十代前半にかけて、両親のつけてきた家庭保

育の記録を目にする機会があった。もちろん研究者としての本筋に沿っての記録であるから、私が執着する過去へのノスタルジーとは無縁の内容である。そのことは承知のこととしても、当事者として私の登場する保育記録を読んだ第一印象は、「どうしよう、全然憶えていない」であった。通っていた幼稚園の地理的な位置や、家屋の構造は一致するとしても、記録の文面からうかがわれる、家庭生活を続ける上での両親の努力、性懲りもないような楽天的けなげさを子供の頃の私は感じたことがなかった。雨の日に退屈して苛立った子供たちをもてあましかける様子、姉妹喧嘩や登園拒否。どこを読んでも、「本当にそんなことあったわけ」という思知らずな感想ばかりが先に立った。両親の存在など「空気のように」しか思っただけであったのである。両親が最善を尽くして子育てをしてきたこと、これをもっとも大きな「忘れてしまったことさえ忘れてしまったこと」なのかもしれない。

最後になってしまいしたが、読者の皆さんに感謝の気持ちを伝えたいと思います。十二年間担当してきたカットの連載が今号で終了いたします。読者の方々の大部分が保育者であられる『幼児の教育』で、「空気のような」スタッフと安心して作業を続けられたことは幸運でした。スランプの時にも、「うまく描けないけれど、どうしても描きたいもの」にこだわったり、心配ばかりお掛けしましたが、愛着のある作品が数多く生まれました。

読者の皆さん、長い間、本当にありがとうございました。



私がつつた幼稚園・保育園(7)

記憶の中の風の抜け道

森下 みさ子

空を飛んだ!?

空を飛ぶ夢を見る子は想像力が豊かだと聞いたことがある。それがほんとうなら、毎日のようにスイスイと空を飛び回る夢を見ていた幼い頃のわたしは、かなり想像力に恵まれていたことになる。自分の例を引かないまでも、土踏まずが十分に育つていず、文字通り地に足のつかない歩き方でこの世界を探索している「子ども」は、人々の想像力の深みにおいて「飛ぶ」イメージと結びつきやすかったのだろう。小さな羽根をつけた赤ん坊の天使も、子どもの代表たるピーターパンも、「子ども」であることの証のように軽々と空に

浮かび風に乗る。けれど自分が、いくら風に吹き飛ばされそうなくらい小さかったとはいえ、この身をもってほんとうに「飛ぶ」とは思いもよらなかった。

近所の私立幼稚園に通い始めたのは四歳、年中さんといわれる年である。幼稚園に通つてまもなく「空飛ぶ事件」が起きた。幼稚園にどんな遊具が置かれていたのかはつきりとは覚えていないのだが、「すべり台」は確かにあった。縁をつかんだ手に感じるかすかな摩擦、お尻から太ももにかけて感じた板の熱さ、そして何よりも高みから風をきつてすーっと降りていく心地よさは、今もなお身体の記憶に刻みつけられている。子どもたちに人気の遊具だったのだろう、その日もすべり台には引きもきらずに子どもたちが並んでいて、いちおう(?)先生にいわれたとおり順番を守って次々とすべり降りていた。いよいよわたしの番になり、さっそうとすべり出した……つもりだったのだが、極端に小さかったわたしは、後ろからすべってきた子どもにポーンと跳ね飛ばされてしまったのだ。その瞬間すべり台のてっぺんから、わたしの体は魔法の粉が降りかかったかのようにフワリと空を飛んだ。気持ちいい! などと思う間もなく、残念ながらお話の世界の住人ではない体は、重たい頭を下にして園庭の砂利の上にコトンと落ちたのだった。

わたしはたぶん泣いたのだろう……が、都合よくその部分は覚えていない。今思うと学生のように若い先生が、まだ舗装されていない道をおんぶして家まで連れて帰ってくれた。首筋に汗をにじませながらわたしを運んでくれた先生は、責任を問われて謝ったりしたのだろうか……わたしの記憶では、母と祖母が頭を下げてお礼をいっていた姿しか思い

浮かばない。その後母に当時のことを聞いたときも、押した子どもは誰だとか幼稚園の責任はどうだとか言われたことはなく、汗だくになって連れ帰ってくれた先生の懸命さに感謝するばかりだった。家の母や祖母が呑気だったのかもしれないが、今ほどには子どもの怪我の責任をうるさくいう時代ではなかったのだろう。

それよりなにより、医者に行つて頭に大袈裟に包帯を巻いてもらつてからのわたしは、とにかく嬉しくて誇らしくて、幼稚園に行くのが俄かに楽しくなつた。一つ上の年長組に兄がいるとはいえ新しい環境に馴染むのに小さな心を碎いていたわたしは、その日から白く輝く包帯頭を見つけた子どもたちから「頭どうしたの?」と、進んで声をかけてもらえる人気者（とは違ふのだけれど……）になつたのだから。傷が癒え、わたしに特別な徴を与えてくれていた包帯がとれる頃には、わたしはみんなと同じ年中さんとして、ひざこずうの擦り傷に塗られた真っ赤なマーキュロのお目様（先生がお目様の形に塗つてくれた）を誇りに園庭を飛び回っていた。すべり台だけは、押されても飛び出さないように少しふんばるようにしてすべっていたけれど……。

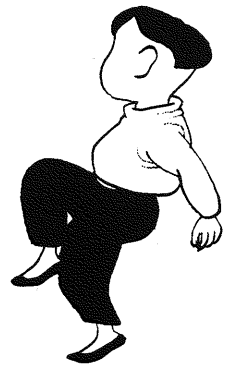
### 踊り子めざして

ワカメちゃんのような刈上げをしていたわたしからは想像もつかないが、当時流行りのバレエ漫画と、絵本で見た人魚姫が踊るシーンに魅せられていたわたしは、「大きくなたらすらりと手足の伸びた踊り子になろう」と密かに華麗な未来像を描いていた。当時と

しては珍しかったのではないかと思うが、わたしの幼稚園では保育が終わると、希望者対象に保育室を使っているいろいろなお稽古事が開かれていた。一番人気はオルガン教室だったが、わたしの関心はごく少数の子どもしか受けていないバレエ教室の方であった。一度幼稚園から帰って、黒いびたつとしたお稽古着と、上履きとたいして変わらないバレエシューズをもってまた幼稚園に行く。まだ子どもが狙われるような事件がなくてどかだったのか、幼稚園の行き帰りは近所の郁也ちゃんと手をつないで、バレエ教室には一人で駆け出していったように思う。

ちよつと怖いくらい崇高な感じのする先生が、幼稚園の先生のニコニコ笑顔とは違う「ほのかな微笑」を、すつと伸びた首の上にたたえながら、「アン・ドゥ・トロウ」と澄んだ声を響かせて様々なポーズを教えてくださいました。靴はちゃんとそろえる、挨拶はきちんとする、練習はさぼらないなどけつこう厳しかったけれど、本物のトゥシューズを履いて、ピンと張ったチュチュを身に付けて、音楽に乗って舞い踊る……美しいバレリーナを夢見ながら練習に励んでいた。今思うと、わたしの練習など練習のうちにも入らず、発表会と称して衣裳を作らされる母の方がよっぽど大変だっただろう。

それに、これは後でわかったことだが、わたしたちがやっていたバレエは子ども向けの「童謡バレエ」というものだったらしい。どうりで、流れる音楽が「ツクシの小坊主」や





「トンボのめがね」や「アジサイ花手まり」といった童謡の類だった。そうとも知らず、本格的なバレエの一步を踏んでいると思ひ込んでいたわたしは、毎週土曜日にお稽古があるので（「童謡」ではなく）「土曜バレエ」だと勘違いしていた。だから、土曜日のお稽古が火曜日に移ったときは当然のごとく「火曜バレエ」になったと思ひ、近所のおばさんに聞かれたときも大いばりで「火曜バレエを習っている」と説明した。おばさんはそれを「歌謡バレエ」と受け取ったのだろう、後日、母は「みさこちゃん、歌謡曲に合わせて踊ってるんですってね」と言われたそうだ。

### お山の上

幼稚園の中で一番魅力的だった場所といえば、迷わず「お山」を挙げる。どの遊具にも増して、園庭の片隅にあるこんもりとした小さなお山は、子どもたちの冒険の場であり、ごっこのお話が生まれる所であり、ないしょの話の種が埋められている場所であった。今思えば、大人の背丈ほどの低木が植えられ、木でできた手すりがつけられただけの、登って降りる程度の小山なのだが、子どもたちにとってそこは特別な場所だった。先生の目が届かず、低木とはいえ陽射しがさえぎられ、湿り気のある土の匂いがする小山は、年少さんや幼稚園に来て間もない子どもには入りにくく、それだけに子どもたちだけで小山に登れるようになるのが誇らしかった。年長になると、幼稚園の遊具をすべて遊びこなしたわたしたちはしょっちゅう小山に登り、つつじの花や葉っぱや棒切れや、地面から這い出し

てきた小さな虫を相手に数々のお話をこつこに仕立てて遊び込んだ。

学生時代、附属幼稚園の観察をさせてもらったとき、わたしはよく子どもたちについて「お山の上」に行った。こちらは同じく「お山」とはいうものの園舎から離れた本当の小山で、てっぺんには銀杏の大木がある。木漏れ日が降り注ぎ、ざわざわとこずえが歌い、秋には金色の葉が舞う木の下で、子どもたちは飽くことなく遊び続けていた。その様子を見ながら、何度となくわたしの胸中にはあの頃の小山が、小山で遊び込んだ記憶が蘇った。小山というだけで規模も雰囲気も違うのだけれど、人や物や建物が与えてくれる力とは異なる、静かさや厳かさ、温もりや安らぎやときめきが、小さな自然の中に共通して息づいていたように思う。

だから、附属幼稚園のお山の銀杏を切る計画に対して子どもたちのために体を張って木を守ってくださった先生がいらしたことを聞いた時、子どものことを学ぶ学生として感銘を受けたことはもちろんだが、同時に、心の奥で幼い頃の小さなわたしもまた拍手喝采したのだった。

### 今、振り返って

子どものことを大学で学び、本を読み、人の話を聞き、みずからも研究する中で、「子ども」について詳しくなくなった気がすると同時にますますわからなくなることもある。断定したり結論づけたりすることが難しくなっている。保育者向けのテキストには、確かに

「すべり台で遊ぶときの注意」などを書き込む。子どもが遊ぶ場では怪我をしないように配慮する、というのが保育の鉄則だ。けれど、そんなことを書いている最中に、包帯頭を得意げに幼稚園に通う小さなわたしがふっと顔をのぞかせる。まるで、盲腸の跡を誇らしげに見せているマドレーヌのように……。なんでもプロにまかせて早期に教え込もうとする昨今の稽古事ブームを見ると、この世界の入口で体験してほしいことがもつとたくさんあるのに……。と批判したくもなる。が、そんなときも、プロのバレリーナの先生を見ながらますますバレエへのあこがれを強めていた小さな自分を否定する気にはなれない。草の匂い、土の感触、園舎からも先生の目からも離れて小さな自然が遊び相手をしてくれる、あの魅力的なお山が幼い者たちにとってどれほど大切な場所だったか……。身体の記憶の底から呼び覚ますことはできても、きちんと言語化して論じることが難しい。いや、たとえそれができたとしても、言葉にした途端に抜け落ちるものがある。それが、一番大切な何かであるのに……。

幼稚園という、子どもが初めて経験する集団生活の場で、まだ土踏まずができあがっていない幼い子どもたちは、それぞれにどんなふうにも地面を踏んで歩き出しているのだろう。それは、地面に足がついてしまったわたしたち大人が想像するのとは、どこかちよつとずれているのかもしれない。だから、いいのだ。小さな者たちの感覚が謎めいた風のように言葉の隙間を吹き抜けていく、子ども研究にもそんな風の抜け道を残しておきたいと思つた。

(聖学院大学)

# 幼児教育の独自性はどこにあるのか(5)

矢野 智司

## 生命のフレールベル 下

無関係にみえる事物や出来事を、共通するパターンを見いだす直感によって結びあわせる思考法は、とても高度なものです。このようななぞなぞは詩を生み出すだけでなく高度な哲学へと展開していきます。有名なスフィンクスのなぞなぞもそうですが、トールキンの名作ファンタジー『指輪物語』(瀬田貞二訳 評論社)の発端となった『ホビットの冒険』(瀬田貞二訳 岩波書店)の

なかで、ゴクリがビルボに出したなぞなぞはそう  
です。

どんなものでも 食べつくす、

鳥も、獣も、木も草も。

鉄も、巖も、かみくだき、

勇士を殺し、町をほろぼし、

高い山さえ、ちりとなす。

答えはもちろん「時間」です。ビルボはゴクリから魔法の指輪を奪い、これが後の大きな物語となるのですが、続きは原作をお読みください（映画もすてきです）。さて時間という目に見えないものは、時計の発明によって人間の支配下に収まったようにみえます。私たちは一秒の何万分の一まで正確に計ることができるようになりました。しかし、どれほど細かく正確に時間を計測することができても、時間は人間のコントロールの及ばないものです。そして、時間の本当の力は、このなぞなぞによって直感的に理解されているように、すべてを食べ尽くし呑み尽くしてしまうところにあるのです。

フレーベルに戻りましょう。フレーベルは「子どもは植物だ」といいます。子どもを植物に喩え、保育者はその植物を育てる園丁（庭師）に喩えました。そうすることで保育を植物の栽培に喩

えました。このような文章は修辭上のたんなる喩えにとどまりません。植物と同様に、内発的に発芽し花を咲かせる力を、子どものなかに見て取る教育思想の表明でした。そして、そのような内発する力を育て守るものとして保育者をとらえる教育思想の表明でした。そのような教育思想は、外から働きかけて、保育者の思いにかなったように人間を作りだそうとする、それまでの教育思想の対極にあるものです。

このような保育を栽培に喩える保育の思想は、反対に栽培や園芸の智慧を保育の智慧に変えてまいります。たとえば、チェコの国民的作家カレル・チャペックの園芸家の楽しみを描いた『園芸家十二ヶ月』（小松太郎訳 中公文庫）といった本と、フレーベルの教育思想は不思議な共鳴現象を起こします。最後の箇所を引用しましょう。

われわれ園芸家は未来に生きているのだ。

バラが咲くと、来年はもつときれいに咲くだろうと考える。一〇年たったら、この小さな唐檜が一本の木になるだろう、と。早くこの一〇年がたつてくれたら！ 五〇年後にはこのシラカンバがどんなになるか、見たい。本物、いちばん肝心のものは、わたしたちの未来にある。新しい年を迎えるごとに高さとうつくしさがましていく。ありがたいことに、わたしたちはまた一年歳をとる。

園芸家のかわりに保育者を、バラや唐檜のかわりに子どもの名前を入れていくと、この園芸家の一年を描いたすてきな書物全体が、保育者を描いた物語として読むことができるでしょう。園芸家の植物への配慮や努力のあり方、あるいは開花への喜びや未来への希望には、保育者と共通すると

ころが少なくありません。

もちろん、保育を工場の生産活動に喩えることもできません。保育とは標準や基準どおりの優れた生産物を生み出すことです。このとき保育者は工場労働者です。あるいは、保育を陶工のようにとらえることもできます。子どもを理想的な形へと塑造していく保育。このとき保育者は陶芸家です。それぞれの喩えには一理あるところでしようが、幼児の教育において栽培のメタファーは、子どもの伸びようとする力を信じることに、子どもの成長の力を読み取って保育をすること、未来を信じることなど保育にとって大切なことを教えてくれます。栽培のメタファーは、現在でも幼児教育にとつては優れたメタファーだと思います。

この世界のうちには実に多様な事物や出来事があります。メタファーの思考法は、それらを固定したものにとらえず、発展していく生きたパ

ターンとしてとらえ、そのパターンの間に共通のパターンを見いだします。このような思考法は、神話的な思考法でもあり、一見すると未熟な低次の思考法とみえるかもしれませんが、遊びとなり詩となり物語となり哲学となるだけでなく、科学にもつながっていきます。科学技術の発明や発見に、メタファーの思考法が大きな役割を果たしていることは科学史でよく知られています。

さて、このようにフレイベルの思想の特徴を、メタファーの思考法としてとらえることで、フレイベルの教育思想はとてむわかりやすくなります。フレイベルの引用で見たように、フレイベル



はすべてのもののなかに同一の自然に生命の法則が貫いていると考えました。ですから人間も植物と同じ法則でもって理解できると考えました。これは一種の宗教的信条のようなものですが、現代の自然科学においても、さまざまな事物や出来事のうちに同じ方の法則が貫いていることが知られています。たとえば、一律の動きで回転しながら成長する巻き貝の巻き方と、ひまわりの種子の配列は、同じらせん形であるだけでなく、同じ数学的法則にしたがっているのです。このような事例は、草花から虫や動物そして建築物にいたるまで多様なものにもまで及んでおり、ジョージ・ドーチの『デザインの自然学』（青土社）のなかにたくさん見ることができます。

前回、子どもが球をつかんだりはなしたりすることで、世界の秩序や宇宙の法則を予感するという教育思想は、不思議な思想だと述べました。し

かし、それは本当は不思議なことではありませ  
ん。子どもが球をつかみはなすことと、宇宙を貫  
く合一・分離・再合一の運動との間には、律動的  
な運動に共通するパターンがあります。このミク  
ロなパターンとマクロなパターンの間に共通する  
パターンがあるとすると、子どもがミクロな世  
界を作りだすことで、共鳴が生じマクロな世界を  
予感することができると考えるのは、不思議でも  
なんでもないことです。そしてこのリズムミカルな  
共鳴は歌をともなつてなされ溶解体験へと導かれ  
るのです。

このような共鳴は、恩物のようなメディアに  
よつてのみならず、身体の振舞いによつても生じ  
ます。たとえば、たくさんの子どもたちが輪に  
なつて保育者の周りを取り囲んでいるのはそうで  
す。幼稚園や保育園ではどこにでも見られるごく  
普通の風景です。しかしフレーベルは手を結んで

輪を作ることには深い意味があると考えます。輪  
を作ることで、子どもは全体と個という関係を学  
ぶのだといえます。たしかに、輪になることで世  
界の中に小さいながらも調和した一つの完全な宇  
宙が出現します。そこではすべてのメンバーが平  
等な位置に立つことができます。絵本作家たち  
は、調和的な世界の姿をしばしば人間と動物たち  
とが輪舞する姿で描いていますが、それはフレ  
ーベルの思想を知らなくても合点がいくことでし  
ょう。このように子どもは身体を使ったメタファ  
ーの思考法を生きているのです。

ここでもフレーベルは「生の合一」が、つまり  
溶解体験が生じるといいます。子どもたちは皆で  
手をつなぎ輪を作ることと、集団全体と解け合う  
瞬間を体験し、それとともに全体のなかの個とい  
う認識も生じるといいます。子どもはこの体験を  
言葉でもって適切に表現することはできません



し、またその必要性もありません。しかし、身体を通じたメタファーの体験は、子どもの身体を通して子どもの哲学となり、世界を動的なさまざまなつながりとみるエコロジカルな世界観へと発展することになります。

このようにフレーベルの「生の合一」を中心とした教育思想には、発達することと生成することが同一であるような、言い換えれば、人間になることと人間を脱して動物になることが同一であるような原理を見ることができません。しかし、フレーベルの思想は、彼の身体に宿った自然Ⅱ生命をとらえる生の技法と密接につながっています。ですから、彼の書いたテキストを読んだだけでは実際に教育することはできません。後の世代になると、フレーベルの生きた精神を受け継ぐことができなくなり、彼の方法だけを形式的に墨守する

ことになりました。そのためフレーベルの幼児教育のシステムは、子どもの生きた現実からはなれ、その結果、石のようになり生命を失うことになったのです。フレーベルの教育システムが現代にそのまま通用するとは思いませんが、彼が目指していた自然Ⅱ生命との溶解体験としての「生の合一」の思想は、輝きと重要性を失ってはいないと思います。

さて、生成・遊び・動物になることなどが、これまでの幼児教育において特別なことでないことが明らかになったと思います。ではなぜこのような自然Ⅱ生命の思想が必要だというのでしょうか。次回の最終回では、幼児教育の独自性はどこにあるのかをそこから述べたいと思います。

(京都大学)

## ボランティアから職員へ

斎藤 実雪

ボランティアとして保育に関って

私が初めていずみ保育所（現在のいずみナーサリー）と出会ったのは、発達臨床学講座の掲示板でした。保育所ができた、ということさえ知らなかったのですが、「保育所でボランティアを募集しています」との掲示を見て、将来保育士として働きたい

と思っていた私は、すぐに担当の教官に相談にいきました。そのときには、週二、三日行ける人でないといけないと思っていたので、週一日でもなんとかボランティアをさせていただけないか、とお願ひしたところ、保育所の皆さんは快く受け入れてくださいました。

ボランティアとして保育に参加するようになった

て、初めて出会ったHちゃん。この人との出会いは、私が「保育士になろう!」と改めて感じさせてくれたものでした。Hちゃんは一日に何度も「トイレ」と言っていて、おまるに座る毎日でした。おそらく、Hちゃんなりの不安のサイン、逃げ場であったのではないかと思います。保育所に初めて通いだしたHちゃん、そして初めて定期的にボランティアをすることになった私。どちらも同じように、保育所に対して不安を抱えていたように思います。私はこのHちゃんの「トイレ」の言葉に、ただただついていくことができずにいました。一日に十回にわたったこともあったと思います。しかし、どう対応したらよいのかわからない中で悶っていたこの経験は、当時の私の「支え」にもなっていたように思います。

そして、私がボランティアとして保育に参加し始めた頃は、保育時間も十時半から十六時半と短く、朝と夕方それぞれ三十分は、職員の皆さんとのミー

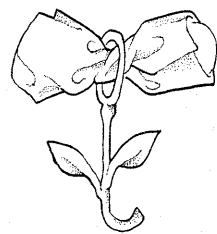
ティングの時間でした。地域の保育園で、短期のボランティアをした経験は何度かあったのですが、そのときにはこれほど丁寧なミーティングの時間はなく、いずみ保育所でのこのミーティングの時間は、私にとつてとても貴重な時間でした。「こんなことで困った」「こんなことが楽しかった」など、職員の方にいろいろと聞いていただき、アドバイスをいただくことで、次の週の保育がとても楽しみでした。

ボランティアの継続もかねて、大学四年次にはインターンシップ生として保育に参加することになりました。仕事内容、保育内容はボランティアのときとさほど変わらなかったのですが、インターンシップということもあり、職員意識をもつよう心がけていました。しかし、実際にはボランティアの頃と変わらなかつたかもしれません。

インターンシップ生として新たにできるようになった仕事の一つは、子どもの連絡帳を書くことでし

た。初めは何を書いてよいのかわからず、また、その連絡帳の大切ささえわかっていませんでした。しかし、回を重ねるごとに、自然に子どもの様子を伝えることができるようになり、また、連絡帳の大切さに気付くことで、見えてくる子どもの姿も変わってきたように思います。

このボランティア・インターンシップとしての約一年半の間、私が子どもとの関係の中で悩んだのは、「どこまで叱ったらよいのか」「どこまで伝えてよいのか」「トラブルに関してどこまで介入してよいのか」ということでした。ボランティアはもちろん、インターンシップでも、本当の“職員”ではなく、また、週一日という限られた時間の中で、子どもとの関係をどう築いていくか……そしてそのある意味「曖昧な」関係の中でどう関ったらよいのか。悩みながらの保育は一年半続いていたように思います。しかし、職員の方の対応の仕方や、言葉のかけ



方などを見て学び、まねさせていただくことで、少しずつ関り方を学んでいったように思います。また、今になって感じるのは、週一日でも保育所で、半日ではなく一日過ごしたことは大きかったと思います。半日のボランティアの方もいましたし、私も都合により半日しか保育に参加できない日もありました。が、午前中しか保育をしていないと、「午後どうなったかな？」と気になったり、午後からボランティアに行くと、午前中にあった出来事を知らないのです。どこか関りにくい部分もありました。保育は、人と人との関りであり、ある程度の時間を共有することで可能になるということを実感しています。

## ボランティアから職員へ

大学四年の十一月。いずみ保育所で次年度四月からの新規採用のお話をいただきました。卒業論文の落ち着いた二月から、研修も兼ねてアルバイトとして週に二〜三日保育に参加していましたが、このときはまだ、子どもにとっては「お姉さん」という存在だったように思います。

四月から職員として働くようになると、子どもからいろいろな場面で「試される」ようになりました。いままで「お姉さん」だった人が、毎日保育所に来て、それまでとは違った対応をするのですから、無理ありません。子どもたちも戸惑っていたのだと思います。この「試される」行動の中で、わがままはどこまで通るのか、どこまでは許してもらえるのかといったようなことに関して、こちらの対応の仕方を見られているような感覚でした。

この「試す」行動の一つが、午睡時によくあらわれていたように思います。私が午睡対応に入ると、寝ないというだけでなく、騒いだり、歩き回ったりと、寝る様子はまったくなかったのです。もちろん、言葉で説明したり、ときには叱ったりすることもありました。それでもなかなか聞き入れてもらえず、他の職員に午睡対応を代わってもらうとすぐに寝付く、ということが毎日のように繰り返されました。できないからといって、いつまでも避けていることも嫌だったので、何度も挑戦しましたが、寝かせることのできない日が続き、悩みの種となりました。しかしその中で「この子はおでこをさすると落ち着くのよ」などのアドバイスをいただくと同時に、自分なりに子ども一人ひとりの特徴を捉えて寝かしつけやわがままへの対応を変えていくと、次第に私が午睡対応に入っても落ち着いて眠るようになりました。それまでなかなか寝てくれなかった子

が寝付く姿はともかわいらしく、いまでは午睡対応を希望するほどになりました。

また、散歩でも“試す”行動は見られました。ボランティアのときには、散歩に出ると手をつないでくれたのですが、職員になってから逆につないでくれなくなったのです。他の職員と二人で四人の子を連れていくときなどは、その相手の職員に四人とも集まってしまうこともしばしばでした。おそらく、ボランティアのときには保育士さんのサポートとして動いていた私が、職員となつてからは、ボランティアのとき以上に安全面や散歩の流れを意識するようになり、子どもの思いに応えきれない部分が増えたことが一因ではないか、と思います。また、“いやと言って拒否したり、話を聞かずにいたら、この大人はどうするか”ということを見られていたように思います。

ボランティアから職員というこの移行時期には、

つらいことのほうが多かつたように思います。しかし、できる限り子どもの思いに応えるようにしながらも、こちらの伝えたいことやどうしても譲れない部分、たとえば、どんなに泣いても今はそれはできない、ということなどをきちんと言明するよう努めました。子どもの思いを受け容れるだけでなく、自分の思いも素直に表現することで、だんだんと子どもと真剣に向き合うことができるようになり、また、保育士として自信をもとうと思うことで、子どもとの関係ができてきました。まだ自信をもつて“関係ができた”とは言えず、“できつつある過程”ですが、“お姉さんとほく・私”という関係から“保育士とほく・私”に変化し、目を見て話を聞き、納得してくれるようになったと思います。

### 職員として

保育士として働き始めて二年目になりました。

「自分の仕事」として「保育」をすることには大分慣れてきましたが、現在は「待つ・出る」のタイミングの難しさを感じています。「もう少し待つてみたらよかった」と思うことも多く、場の雰囲気や壊さないように場に参加したり、その場から引いたりすることができないでいます。しかし、失敗してしまつたことも無駄にしないようにと、迷つた場面は記録に残すようにしています。そのときには答えは出なくても、少し時間が経つてから読んでみると、違つた対応が浮かんでくることもあります。

また、保育士同士の連携の大切さも、日に日に大きく感じるようになっていきます。今年度に入つてから、一つのテーマに関して保育士全員で意見を出し、話し合う時間もてるようになりました。保育の中での行動について、それぞれの保育士がどんな思いをもっているのか、ということ言葉をしてお互いに伝え合うことで、理解が深まり、より連携し

やすい環境になつていると感じています。

保育に関しては、先輩保育士さんたちにはまったく追いつけないままです。しかし「自分の保育・自分のやり方」を見つけないと思つています。そして、保育だけでなく事務的な仕事においても、自分のできることから始め、できないことも認識した上で、できないことについては今後どのようにしていったらよいか、ということを考え、できるようにしていきたいと思ひます。ボランティアをしていた頃は、自分のマイナス面さえ気付かないでいました。しかし、それに気付き自覚することで、自分自身の見直しにもつながると感じています。初めてのボランティアで、Hちゃんのトイレに何度もつきあつていたあの頃の思いも時々思い出しながら、「新たな自分」と「自分の保育」を見つけていきたいと思ひます。

(お茶の水女子大学附属いずみナーサリー)

# たけのこ幼稚園とラジオのおつちゃん(9)

しょうごもり  
庄籠

道子

## おつちゃん、連行されるの巻

たけのこ小学校の運動会が終わったからといって油断  
してはいけません。今度はたけのこ保育所の運動会が  
ある。たけのこ幼稚園の子どもたちは、みんなたけのこ  
保育所の卒業生なので、みんな招待される。大きな顔を  
して行けばいいのである。

その日は土曜日で、幼稚園はお休み。幼稚園の子ども  
たちは、おうちの人に連れられて、大きな顔で保育所に  
やってきた。

小学校の運動会では、一生懸命走っても「かわいい  
ねー」と言われるばかりだったが、保育所では違う。幼  
稚園の子が全力で走ると、保育所の子たちが「う  
わー!」「はーい!」「かっこいい!」と、憧れと尊  
敬のまなざしで見ると、保育所の先生たちや他の大人たち  
も「大きくなったな」「早ようになったな」「さすが幼稚  
園やねー」と言ってくれる。ははは。ざまあみるだ。三  
人組もすっかり上機嫌で、保育所からもらったジュース



を飲んでいた。

もちろん、たけのこ保育所の運動会にもラジオのおっちゃんは参加する。毎年恒例のことだ。ちゃんとおっちゃんの分のジュースも用意してある。

その日もおっちゃんは「あー！」と大きな声を出して、小さな子をどかせた後、保育所の庭を走っていた。

その時、招待客の中のおまわりさんが立ち上がったのにりょうたが気づいた。招待客の中に、いつもだったから、幼稚園の先生たちもいるんだけど、今年はいない。それから、おまわりさんは、いつもは、たけのこ村の駐在所のおまわりさんがいるんだけど、今年は、見たこともないひげのおまわりさんがいた。

ひげのおまわりさんは、ラジオのおっちゃんが門の方に向かうのについていった。そして、おっちゃんの腕をつかんで何か言ってる。変だ。三人組は、顔を見合わせ、あわてて走ってついていった。

保育所の門の前にひげのおまわりさんが乗ってきたバトカーが止まっていた。ひげのおまわりさんは、ラジオ

のおっちゃんの腕をつかんだまま、おっちゃんをバトカーに乗せた。おっちゃんはいやがってるみたいだ。降りようとしている。でも、ドアに鍵がかけられた。ひげのおまわりさんは運転席に座ると、バトカーを発進させた。

おっちゃんが、バトカーで連れていかれた！

三人組はぼかんとして、バトカーの後ろを見送っていた。

ラジオのおっちゃんがバトカーに無理やり乗せられたのを見たのは、三人組と、あと何人かのお母さんたちだけだった。

「ちよつと、ちよつと……」

目撃したお母さんたちは、他の人たちにうわさをひろめにいった。

翌月曜日、三人組は早く幼稚園に行った。きのうの日曜日、三人で集まって相談した。

「ラジオのおっちゃん、どこに連れていかれたんやろ？」

「どこって、おまえ、警察に決まつてるやろ」

「えーっ、おっちゃん、刑務所に入れられるんかいな。なんや。ラジオのおっちゃん、何か悪いことしたか？」

「いいや。何も。いつも通りやったで」

「そや、そや」

三人組はそれぞれの家族に尋ねてみたが、みんな「そりや困ったこっちゃな」。「まあ、おまえが心配せんでもええことやで」とか言うばかりで、話が先に進まない。

三人組は、また集まつて相談した。

「警察、連れていかれて、どないなるんやろ」

「なわでしばられて、ござの上に座らせられるんや」

たつやが言うと、

「えっ？ ござ？」

りようたとしなりが同時に聞いた。

「あ、ごめん、ごめん、それは時代劇や。机のある狭い

部屋に連れて行かれるんや」

「窓に鉄格子とか入つとるとこやろ」

「そや。そして、机があつて、こつちに刑事が座つて、あつちにラジオのおっちゃんや座らされるんや」

「刑事の前には紙が置いてあつてな、ほんで『名前

は？』つて聞くんや」

「えーっ!? ラジオのおっちゃんつて、名前、言えるっけ？」

「さあ。名前言うたん、聞いたことないわ」

「ほんま、聞いたことないわ」

「名前、言わへんかったら、どないなるん？」

「怒られるんとちゃうか？」

「机をバン！ と叩いて『こらあ、さっさとはいかんかー！』とかつて」

「げー」

三人組は、明日幼稚園に行つて、先生たちに相談しようということを決めた。

「さあ。名前言うたん、聞いたことないわ」

「ほんま、聞いたことないわ」

「名前、言わへんかったら、どないなるん？」

「怒られるんとちゃうか？」

「机をバン！ と叩いて『こらあ、さっさとはいかんかー！』とかつて」



だから、月曜日、三人組は早く幼稚園に来たのだ。

「おはよー！ あら、三人とも早いじゃないの？」

籠先生が元氣いっぱいで言った。全く。この人には悩みというものが無いんやろか。三人組はため息をついた。

ラジオのおっちゃんがパトカーに連れていかれた話をすると、籠先生は突然怒り出した。

「あんたら三人もおつて、何で止めへんやったん？ おまわりさんに、『この人は何も悪いことしていません』つて何で言わへんやったん？」

そんな無茶な。相手は警察やでー。はむこうで反対に僕らが連行されたら、どないすんねん。

ちょうど、そこへ、あいこ母子がやってきた。あいこのお母さんもラジオのおっちゃんがパトカーに乗せられたのを遠くから見てびっくりしたと言う。

招待されたけど、幼稚園の先生たちは、二人とも用事があって、保育所の運動会に行けなかった。そして、ど

うやら、たけのこ村の駐在所のいつものおまわりさんも、研修会か何かがあつて遠くに行つて留守だったらしい。そして、たけのこ村のむこうのどんぐり村のそのまたむこうのきのこ山の駐在所のおまわりさんが替わりに来たらしい。きのこ山の駐在所のおまわりさんは、ラジオのおっちゃんのことを知らなかつたらしい。どんぐり村の駐在さんなら良かったのに。ラジオのおっちゃんのこと、知つてるから。

あいこのお母さんも憤慨している。

「ラジオのおっちゃん、何も悪いことせえへんのに、勝手に連れていつて、ひどいわー」「ほんまですねー。何とかして助け出さなー。どないしたらええんやろー」

籠先生も竹田園長先生も腕組みをして考えている。

三人組も考えている。やつぱり牢破りしかないか。時代劇の好きなたつやが、そう言おうと口を開きかけた時、ラジオ体操の音楽が聞こえてきた。みんなが振り返った。ラジオのおっちゃんが右手を振りながら歩いている。左手で、いつものようにラジオを耳にあてている。

「おっちゃん、おはよー。警察から帰れたんやね」

あいこのおかあさんと先生たちが口々に言ったが、おっちゃんはラジオ体操の世界にいる。こちらを見ることもなく、そのまま歩いていった。いつも通りの下着のシャツ。いつも通りの作業ズボン。いつも通りのぞう

## 記者会見の巻

まきのお母さんは、おなかが大きかった。六月頃、

「まきちゃんのおかあさん、あかちゃん生まれるんやね。ええねえ」

と籠先生に言われて、まきはすごく怒った。

「おかあさん、あかちゃんなんか生まれへん」

「あら、だって、まきちゃんのおかあさん、おなか大きいんちゃうん？」

そう言われて、まきは血相を変えた。

り。

「よかったね」

みんなは、顔を見合わせてにっこりした。

「牢破り」をして「打ち首獄門」にならなくてよかった。たつやもほっとした。

「ちがうもん。あかちゃんでおなか大きいんやないもん。おかあさん、ごはん、食べ過ぎただけやもん」

そう言つて、まきはぼろぼろ涙をこぼした。まきは二

歳年下の妹がいる。妹が生まれたとき、おかあさんをとられたような気がして、まきはつらかったのだろうか。

籠先生は黙ってしまった。「先生がまきちゃんを泣かした」とはやそうとしたけど、怒られそうな気がして、三人組は目配せしただけだった。

そのあと、まきは、毎日のように「妊婦さんごっこ」をした。

ふとんをしく。病院に電話をする。

「大変です。もうあかちゃんが生まれそうなんです」

「はい、すぐ入院してください」

スカートの中に何匹もぬいぐるみを入れていた。

「うーん、うーん。生まれそうです。うーん、うーん」

うなる。臨場感があふれている。

「あ、生まれました！」

スカートからぬいぐるみがポンポン出てくる。

「おめでとございます！」

まきは、毎日毎日妊婦さんになっていた。

いつのまにか、「まきちゃんのおかあさん、もうすぐ

あかちゃんがうまれるね」と言われても、まきは怒らなくなっていた。

それから半年。そろそろ肌寒くなっていた。まきが朝

来て、こっそり籠先生に言っているのを三人組は聞いた。

「あのね、おかあさんね、あかちゃん、生まれたの」

「やったー。おめでとー！ 男の子？ 女の子？ どっ

ち？」

「男の子」

「そう、弟だね」

話していると、まわりに子どもたちが集まってくる。

「なに？ なに？ どないしたん？」

「まきちゃんち、あかちゃん生まれたんだって。弟だっ

て」

「ふーん」

みんな興味津々だ。

「あーあ、言うてもた」

まきがとがめるように言った。えっ？ 言うたら、あかんやったん？

五日後、まきが、朝一番に籠先生に言った。

「先生、私がいいって言うまでないしょにしとつて。あかちゃんの名前、決まったの」

「なんていうの？」

「ないしょやで。『けんいちろう』。私があとで発表するから、言わんどつてね」

「わかった」

さすがにおしゃべりの籠先生もないしょにしてた。

昼前、竹田園長先生が記者会見を開いてくれた。

「今から重大発表があります。みなさん、準備はよろしいですか。それではまきちちゃん、どうぞ！」

まきはすました顔でみんなの前にすすんだ。みんなが静かに聞いているか、ちゃんとこつちを見ているか、ぐるりと見渡したあと、おもむろに言った。

「あかちゃんの……」

「あかちゃん、生まれたんやんね」

誰かがよこやりを入れた。

「しっ！」

まきはにらみつけた。もう一度最初からはじめた。

「あかちゃんの名前が決まりました。『けんいちろう』です」

パーン！ クラッカーがなった。籠先生、いつのまに用意していたんだろう。

竹田園長先生がまきにマイクをむけるかつこうをして聞いた。

「おめでとうございます。で、あかちゃんは、いつ生まれたのですか」

「十一月七日です」

「あかちゃんとおかあさんは病院からかえってきましたか」

「あした、かえってきます」

「そうですか。それはおめでとうございました」

「はい」

まきは満足そうにすまして、自分のいすにかえっていった。  
(保育研究グループ はるにれ)

# 幼児の教育 第一〇四卷 (平成十七年) 総目録

## ◇第一号

- 卷頭言 保育は芸術なり 青木 久子  
 赤ん坊讃歌 津守 眞  
 十八世紀ドイツの子どもの本(1) 佐藤 茂樹  
 はれ! とまじき・・・その⑩ さとうひろこ  
 子どもと出会う(11) 岩田 純一  
 特集へアジアのお正月  
 インドのお正月 宮地 敏子  
 タイのお正月 堀 浩子  
 中国の旧正月―春節― 首藤美香子  
 韓国の子どもとお正月 朴 香俄  
 「出す」ということ 小倉 定枝

## ◇第二号

卷頭言 三歳児保育の課題 千羽喜代子

## 世界の子育て事情(6) スウェーデン

- 三瓶 恵子  
 田辺 敦子  
 乳児クラスの保育より(6)  
 特集へあたたかい  
 「あたたかさ」を想う 西原 彰宏  
 天使がいた 今井 七重  
 ウサギの微笑み 中嶋 正敏  
 温かい食卓を求めて 村田 裕子  
 昭和戦中期の保育問題研究会の活動(6) 松本 園子

## 障碍をもつ幼児の保育(29)

- 津守 眞・津守 房江  
 ポジティブサポートの世界(11) 村田 愛  
 はれ! とまじき・・・その⑪ さとうひろこ

豆まき・ます・鬼・伝統行事 高橋 陽子

## ◇第三号

- 卷頭言 平和の文化と子育て 島中 徳子  
 子どもと出会う(12) 岩田 純一  
 葉っぱの力(4) 群馬 直美  
 障碍をもつ幼児の保育(30) 津守 眞・津守 房江

## 十八世紀ドイツの子どもの本(2)

- 佐藤 茂樹  
 村田 愛  
 ポジティブサポートの世界(12)  
 はれ! とまじき・・・その⑫ さとうひろこ

## 生き生きと育つ親

- 杉本 裕子  
 メルボルンでの第二十四回  
 OMEP大会に参加して 上垣内伸子  
 オーストラリア 保育・幼児教育 (Educare) 事情 生駒 奈緒  
 一年目を振り返り、そして・・・ 小川 知子

## ◇第四号

卷頭言 新しい幼保関係の創造 新澤 誠治

幼児教育の独自性はどこにあるのか(1)

矢野 智司

特集へあたらしい

カウンセラーの資質 岩壁 茂

あたらしい出会い 赤澤もとめ

子どもが生きるクラスに向けて

林 明日香

香りがつなく新たな出会い 宮崎 薫

私を通った幼稚園・保育園(1) 榎沢 良彦

ある日

映画「誰も知らない」の子どもたち

皆川美恵子

見る・見える・見えない 永倉みゆき

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(1)

庄籠 道子

障害をもつ幼児の保育(31)

津守 真・津守 房江

昭和戦中期の保育問題研究会の活動(7)

松本 園子

◇第五号

巻頭言「ままごと遊び」から考えたこと

秋田喜代美

新しい時代に生きる子どもを

どう育てるか(1)

堀合 文子

中・高校生の「親性」を育む 伊藤 葉子

観察者のノートに子どもが描くものは？

砂上 史子

育てる者を育てる「保育者養成」の課題

塚田 幸子

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(2)

庄籠 道子

十八世紀ドイツの子どもの本(3)

佐藤 茂樹

障害をもつ幼児の保育(32)

津守 真・津守 房江

◇第六号

巻頭言「子ども役割」と「大人役割」の

間(あいだ)——保育体験学習——

武藤 安子

母と乳児と乳母

小林 頼子

障害をもつ幼児の保育(33)

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(3)

庄籠 道子

昭和戦中期の保育問題研究会の活動(8)

松本 園子

幼児教育の独自性はどこにあるのか(2)

矢野 智司

新しい時代に生きる子どもをどう育てるか(2)

本田 和子

特集へかたい

本当に顔にシワはできないと思うか

戸部 惇子

保育者として

吉川 真理

固い絆と柔らかい心を求めて

大村 禮子

かたいリユックサクへの憧れ

菊地 知子

と、かたい言葉へのとまどいと

◇第七号

巻頭言「想像力」から「創造力」へ

秋山 光文

村石京先生 追悼 村石先生との思い出

永井 正子

十八世紀ドイツの子どもの本(4)

佐藤 茂樹



新しい時代に生きる子どもをどう育てる

か(3) 本田 和子

私を通った幼稚園・保育園(2) 金田 利子

あそびの中での学び 石川 征子

児童養護施設の現場から 内田 伴之

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(4) 庄籠 道子

泥だんご作り 伊集院理子

◇第八号

巻頭言 教育機関の著作権等について

ある日 江波 諄子

私を通った幼稚園・保育園(3) 宮里 暁美

子どもの写真に見る大人の眼(1)

荒川志津代

幼児教育の独自性はどこにあるのか(3)

矢野 智司

新しい時代に生きる子どもをどう育てる

か(4) 本田 和子

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(5)

庄籠 道子

特集へ緑蔭図書紹介

他者との関係が、ことはを生き、

「私」をつくる 村松 賢一

神谷美恵子さんとの出会い 岡田 誠治

「現場」の声を聴くこと 実践を物語る

ること 矢萩 恭子

網野歴史学への誘い 榎田二三子

マイ・ディア―二人のへ女の子

菅 聡子

◇第九号

巻頭言 保育の林に立つ美しい木々

津守 眞

児童学からの出発 地域・子ども・大人の

「関係をつなぐ」(1) 小川 清実

子どもの写真に見る大人の眼(2)

荒川志津代

十八世紀ドイツの子どもの本(5)

佐藤 茂樹

私を通った幼稚園・保育園(4) 福元真由美

特集へ「あまい」

農の現場から『あまい』を考える

古谷 久美

通りすがりの「あまい」出来事

松沢 孝博

読みが甘いか 前田 峰子

自閉症児Aさんの場合 大蔵みどり

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(6)

庄籠 道子

くぐること 吉岡 晶子

◇第十号

巻頭言 子どもの「時」 高橋 洋代

死の床の子ども 小林 頼子

「育ち」という言葉と保育者の経験

浜口 順子

これでいいの？ 男の子の育て方

高原 泰子

幼児教育の独自性はどこにあるのか(4)

矢野 智司

ある日

私を通った幼稚園・保育園(5) 野口 隆子

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(7)

庄籠 道子

子どもの写真に見る大人の眼(3)

荒川志津代

児童学からの出発 地域・子ども・大人

の「関係をつなぐ」(2) 小川 清実

◇第十一号

巻頭言 「保育カウンセラー」制度の実

現を期待する 柴崎 正行

十八世紀ドイツの子どもの本(6)

佐藤 茂樹

ある日

保育の場とジェンダー 金子 省子

『現職教育』にむけて 大戸美也子

私に通った幼稚園・保育園(6) 津守 房江

児童学からの出発 地域・子ども・大人

の「関係をつなぐ」(3) 小川 清実

保育におけるケアと保育者のゆらぎ

横井 絃子

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(8)

庄籠 道子

◇第十二号

巻頭言 小児科学は保育学だった

榎原 洋一

特集(ゆるい)

ゆるむ・ゆるい・ゆるやかな

阿部 靖子

遊ぶ子供の声聞けば……

植木 朝子

ゆるむからだの息づかい

郡司 明子

新しい学校のあり方を求めて

鈴木 陽子

ある日

保育「方法」考(一) 戸田 雅美

私の白い空 彌永たたえ

私に通った幼稚園・保育園(7) 森下みさ子

幼児教育の独自性はどこにあるのか(5)

ボランテニアから職員へ 斎藤 実雪

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(9)

矢野 智司

幼児の教育 第一〇四卷(平成十七年)

庄籠 道子

総目録

幼児の教育

第一〇四卷 第十二号

(二〇〇五年十二月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十七年十二月一日

編集兼発行人 浜 口 順 子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8601 東京都文京区大塚二二一一

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8601 東京都港区三田五二二一一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一一四一九

〒〇三三三五三九五五六六一三(営業)

〒〇三三三五三九五五六六一三(編集)

振替 〇〇一九〇一一一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

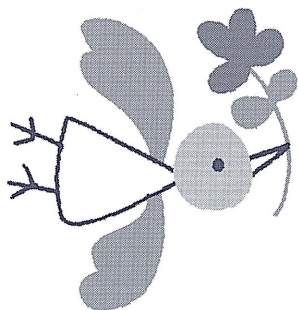
好 評 中!  
発 売 中!

# 子どもの心が かがやくとき

これからの幼児の育ちを考える

漆原智良 著

戦災孤児として戦後を迎えた著者が、自らの体験をもとに、「子への愛情とは何か」をわかりやすく説いています。子どもへの愛情の示し方から、悩む保育者へのやさしさあふれるアドバイス・絵本の読み聞かせまでを感動的に織りなし、保育・教育・育児にかかわるすべての方々へ贈ります。



21×15cm/256頁  
定価1,365円(税込)

## ●目次から

- 第1章 ハマユウの花のように  
—わが半生から学んだ幼児教育
- 第2章 幼児との温かい心のふれあい  
—保育者のひとことが子どもを伸ばす
- 第3章 『読み聞かせ』を楽しむために
- 第4章 保育の悩み相談 Q&A
- 第5章 スピーチの基本ABC
- 第6章 月別『書き出し』文例集

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

最新刊

# 手づくり アンパンマンが いっぱい★

## イベントおしらせ デコレーション

千金美穂・尾田芳子 著

大人気シリーズ「手づくりアンパンマンが  
いっぱい②ルームデコレーション」の続刊です。

色画用紙から生まれたアンパンマン  
ワールドの仲間たちが、季節のイベントを  
にぎやかにおしらせします。  
アンパンマンたちと一緒に、  
園生活を楽しく  
盛り上げて  
くださいね。

定価2100円(税込)  
26×21cm 96頁



★巻末の型紙をコピーして、  
簡単に製作できます。

★型紙の組み合わせ次第で  
いろいろなバリエーションを  
作ることもできます。



### 【既刊】手づくりアンパンマンがいっぱい

- |               |       |                |      |
|---------------|-------|----------------|------|
| 1. グッズ・プレゼント  | 島田明美  | 5. 通園グッズ       | 島田明美 |
| 2. ルームデコレーション | 千金美穂  | 6. つくってね あそんでね | 島田明美 |
| 3. めいぐるみ・おもちゃ | コッベ平沢 | 7. つくってね あそんでね |      |
| 4. ランチとおやつ    | 大森いく子 | パート2           | 島田明美 |

キンダーブックの

## フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五一四円)★